

『夕焼、小焼の
あかとんぼ』



私が育てたカラスの赤ちゃん
VI

石下郁子

- 1 、 目次
- 2 、 カーちゃんの仲間 (30)
- 3 、 『夕焼、小焼の あかとんぼ』 (31)
- 4 、 公園には人がいて (32)
- 5 、 気ままなカーちゃん (33)

カーちゃんの仲間

8月21日

午後、農協で思いがけなく、鳥獣保護委員さんにお会いしました。

その後私が規則を守らず、カラスを飼いつけているかどうかは気になっていたと思いますが、調べに来られるようなこともなく1か月が過ぎていました。

私がカラスに愛情を注いでいたのが分かったので、放せるだろうかとは思っていた、というようなことをおっしゃっていました。

「あの翌日、畑に連れて行きました。その日のうちに親が来ました」というと驚いていました。

深く鳥獣にかかわっている方でも意外に思われるとは、まだまだ野鳥の生態は解明されていない部分があるのだと感じました。

短くこれまでのいきさつを話しましたが、公園に餌を持って行っているとは言えませんでした。

帰り家の近くで1羽でいるカラスを見かけました。カーちゃんかと思い車を降りてみましたが、違ったようでした。

1羽でいるカラスを見ると気になります。たとえカーちゃんでもなく、さびしいだろうと思ってしまいます。

夕方、公園に行きながら、遠くから学童保育の屋根にいるカーちゃんが見えたようでしたが、近づくとそのカラスはもういませんでした。

公園の中に入ってもいつものように飛んできません。学童の方に行ってみると、空き地と国道をまたいだ家の屋根の上にて、私を見ると飛んできました。

手を伸ばすと、いつもは私の手に止まるのに、この日は初めて止まりたがりません。

カーちゃんの体はいっそうボロボロで、抜け落ちた羽もあるのではないかと思う痛ましさです。残った羽も長さがまちまちでラバラになっています。

だれにやられたの？ と息をのむような姿でした。

それでもまだ飛ぶことができる、そして自転車のふちに止まって餌を捜しています。最初水をやりましたが飲みません。もってきた肉、カボチャ、パンなどを食べ、カボチャは残しました。

上空をカラスが低く飛び交っていましたが、この時はなぜか怖がらず平気にしています。

パーゴラの上で少し遊んでいたとき、ビデオショップの電線にさっき横切って行ったカラスなのか、1羽のカラスが止まっているのが見えました。意外にもカーちゃんは、そのカラスから少し離れたところまで飛んで行きました。

樹木すれすれに低く飛んでいます。羽を傷めているので必死に飛んでいるのが分かります。

ずっとカーちゃんの方を見ていると、「小鳥ですか」と小犬を連れた女の人に声をかけられました。私が短くその人に説明する間に、カーちゃんの姿はさっきとは違う場所に移っていて、いつの間にか増えたほかのカラスたちと一緒に並んで止まっています。

おどろきましたが、遠目にも羽がボロボロなのが分かります。その人も「あの2番目のですね

」と羽の傷を見て言いました。

そう、2番目、その横はじにいるのは例の見張りガラスに違いありません。そうしているうちに、我がカーちゃんはみんなと一緒にどこかへ飛んで行ってしまいました。

あのようになんたと行ったのはうれしいですが、カーちゃんの羽を傷つけたのはいったい誰でしょう。この間も、カラスと一緒に飛んで行った日の翌日、羽がボロボロになっていました。

でも傷つけられるのが分かっていたら、カーちゃんはみんなのそばには飛んで行かなかったと思います。それで私はこう私は考えました。

カーちゃんはそのカラスたちに何らかの恩義を受けたのだと。餌をもらうか、危ういところを助けてもらったか。そんなことがあって、仲間に心を開いたのかもしれない。

全くカーちゃんが暮らす空の上では何が起きているのか、見当もつきません。

『夕焼、小焼の あかとんぼ』

8月22日

カーちゃんが姿を見せる公園は南北に細長く、北側はパーゴラがある広場になっています。南側は周囲に樹木が茂り、ブランコや滑り台などが設置してあります。

公園に沿って走る国道は南に向かって坂をのぼるようになっています。

この日いつも行ったことがない午後2時ごろ、公園のそばを通りました。郵便局に行く用事があったためです。

坂道を自転車で登りながら、見るとはなしに公園の方を見下すとカラスが2羽、北側の滑り台の近くを地面をつつきながら歩いていて、そのうちの1羽の羽がボロボロでした。

驚いて自転車から降りて半信半疑ながら「カーちゃん」と呼んでみました。

カーちゃんが仲間と一緒にあんなふうにいるとは思えなかったので別のカラスだろうとは思いましたが、それでも確認のため声をかけてみたのです。

ボロボロ羽のカラスはやっぱりカーちゃんでした。私を見つけるとさっと飛んできて伸ばした私の腕に止まったのです。

私は周辺を自転車で走るような時、もしカーちゃんに出会ったらということを考え、いつも何か食べ物を持ち歩いています。

その日は食パンでした。そのパンをあげましたが、一方だけにあげるのはよくないと気が付き、カーちゃんからパンを半分取り返しました。そして前かごに止まらせたまま、坂を引き返して公園の中に入って行きました。

今しがたカーちゃんと一緒だったカラスは民家の屋根の上にのぼっていました。しかし驚いたことに、そこに別のきょうだい3羽で遊んでいたのです。

これまでもカーちゃんのきょう代いは、私が見張りガラスと呼んでいた1羽がカーちゃんに接近し、他の3羽はそれとは別の行動をとっていました。

この時も同じ公園内でしたが1羽がカーちゃんと歩いていて、3羽が少し離れたところに一緒にいたのです。

私はまず、パンを小さくちぎって屋根にいるカラスが見える場所に置きましたが、そのカラスは警戒心が強く近づいて来ません。

少し離れたところにいる別の3羽のカラスがこちらを見ているので、残りのパンをそばに行って蒔いてみました。こちらは何の警戒心もなくパンを競って食べています。

カーちゃんは何かもっと食べたそうにして、自転車から離れようとしませんでした。あげるものがなくなり、私がこうしているのもよくないような気がして公園を出ました。

カーちゃんは公園を出たところで、自転車からビデオショップの電線に飛び移りました。そしてこちらを見ていました。

自転車を押しながら、再び坂を上り始めました。

公園が終わるところでさっきのカラスたちのことが気になって、国道の上から公園内を見下ろしてみました。

もうどこかに飛んで行ってしまったのか、樹木の影になっているためか、あのきょうだいたちの姿を目にすることはできませんでした。

自転車のハンドルを握ったまま顔を上げると、鼻にぶつかりそうに赤とんぼが飛んでいます。辺りいっぱい飛んでいます。不意に『赤とんぼ』の歌を思い出しました。

夕焼、小焼の、あかとんぼ、負われて、見たのは、いつの日か。

その歌の3番に十五で、ねえやは、嫁にゆき、お里の、たよりも、たえはてた。という歌詞があります。

そこには茫漠とした月日の流れが歌われている、とこれまでいつも感じてきました。そして胸がいっぱいになりました。

この歌に歌われた『ねえや』の家は、きっと貧しかったのです。それで幼くして奉公に出されました。でもそのねえやは十五歳でお嫁に行き、里からの音信も途絶えてしまった、というのが3番の歌詞です。

いつかこの歌の成り立ちを調べた時、三木露風は、思ったより若いころにこの歌を作っていて、私が想像していたものとは違いましたが、それでも過ぎ去った幼いころの自分を懐かしむ歌であったことに変わりはありません。

私がこのとき心打たれ感傷を覚えたのは、赤とんぼが群れ飛ぶ今という瞬間が、これまで果てもなく繰り返されてきた季節のありふれた状況と同じようなものでありながら、自分にとってはまったく異なった意味を持つものだと感じたことです。

そして、まぎれもなくこの今が過ぎ去るのだということを感じていたのです。

カーちゃんが仲間と一緒に歩いて餌を捜していた、でもまだ私を忘れないでいてくれる。このことがうれしくまたさびしくもあったのですが、カーちゃんが私のそばに来るのはもうあとわずか、間もなく別れの時が来るのだとはっきり意識したのです。

夕方、いつもより遅く5時40分ごろ、公園に行きました。

いつもの同時刻だとあたりがもっと明るいのですが、天候が崩れるのかずいぶん暗く感じる夕方でした。

カーちゃんはビデオショップの電線の上に止まっていて私を見て飛んできましたが、いつも犬を連れてくる人の奥さんと、もう一人別の人が来て私に話しかけたため、おどおどしながら少し餌を食べただけで民家の屋根の上に行ってしまいました。

自分がいるから来ないのだ、とその人が言ってくれて離れましたが、男の子が二人、また公園内に入ってきたため、カーちゃんは近くの電柱まで来たものの、こちらを見ながら下りてきません。

いよいよ暗くなったのであきらめて帰りかけました。

振り向くとカーちゃんは電柱をひとつ移って後を追ってきました。そしてまた一つと移ってき

ます。でも飛ぶ姿は確認できず、本当にカーちゃんだったかどうかは分かりません。

天候が今にも崩れそうな気配です。カーちゃんを早くねぐらや仲間のもとに帰さなければと思いました。それで、もう後を振り向かずに家に帰りました。

公園には人がいて

8月23日

5時ごろ公園に行くと、ベンチに子ども用の水筒が置いてあって、学童保育の子どもたち十数人と指導員の方がドッチボールをしていました。

学童保育施設と公園は隣接しており、昨日カラスにパンを上げながら、これがもし日常化するようだと問題になる、と自分自身でも感じていました。

学童保育の人たちは中からその様子を見ていたのだと思います。それでそんなことになっては大変だと思い、公園で子供たちを遊ばせることにしたのだと思います。残念でしたが無理もないことだと思いました。

カーちゃんは私を見つけて飛んできましたが、子どもたちがいるので民家の屋根の上に行ってしまうました。

その前から公園の周りにいて近づけず、私の姿を見て自分がいるのを知らせに来た、という感じでした。

近くまで行くとそばに来たので餌をあげましたが落ちつかない様子です。

今まで一緒にいたものか、民家の屋根の上には別のカラスもいてこちらを見ていましたが、私が注意を向けるとどこかに飛んで行ってしまいました。

見張りガラスは警戒心が強く、声をかけたりすると例外なくどこかへ行ってしまうのですが、この時は私がそちらを見ただけでいなくなってしまうました。まもなくカーちゃんも飛んで行ってしまいました。

あたりは明るく、子どもたちはまだ遊んでいます。

この日は、以前病院で会った、野良猫の面倒を見ているという人に、差し上げたいものがあったて会うことになっていました。仕事が終わって来られるのが6時ごろだというのでその時間に公民館に行くことになっていました。それで5時半ごろ公園を後にしました。

公園を出るとどこにいたものか、カーちゃんの別のきょうだいらしいカラスが数羽、私のあとを追ってきましたが、家の近くまで来て姿を消しました。

8月24日

この日も公園には学童の子ども達が遊んでいました。

カーちゃんは電線に止まって、公園のずっと手前で信号待ちをしている私を見つけて飛んできました。

人慣れて肩に止まったり、頭に乗ったりしているカラスを、通過する車の中から驚いて見る人がいます。

信号が変わり、カーちゃんを自転車の荷台のふちに止まらせいつもの公園を通り越して、別の公園に行きました。

そこでスイカの皮、肉、パン、卵焼きなどをあげました。カーちゃんは肉をいっぱい口に詰め込み少し離れた場所に持って行き、隠すようなしぐさをします。

これはカーちゃんが畑を追われ、それまでよりも仲間と接触を多く持つようになった頃から見られるようになった行動です。

こうしてカーちゃんはだんだんにいろいろなことを覚えていくのだな、と思いました。

おなかがいっぱいになったカーちゃんは周りで少し遊んでいましたが、すぐそばに蟬の死骸があるのに気が付きました。それを不思議そうに見ています。私ははっとしました。

前にも書きましたが、カーちゃんは少しは私の表情を読むのです。それでじっとしていました。私は蟬を少し離れた植込みの中に持って行きました。

私はこの時、人が虎になって旅人を襲うという話、『人虎伝』のことが頭をかすめ、何とも言えない気持ちになったのでした。これから仲間と一緒に生きていくカーちゃんは人々に気味悪がられながら、今は想像もつかないような生き方をしていくのだと思ったのでした。

そしてそれはもう始まっているのだと思ったのでした。

4、5人の家族連れらしい人が犬を連れて歩いてきたので、私はそこを離れました。

カーちゃんは少しの間、民家の屋根から屋根を飛び移ってきていましたがやがてどこかに飛んでいきました。

帰りがけにいつもの公園に顔見知りの方がいたので立ち寄ると、「さっきカーちゃんを自転車に乗せてヒューって、向こうへ行ったでしょう」と言われました。すごくびっくりした、と言われて、そういえばカーちゃんは他の人がいるときは私にもあまり近づいて来なかった、と改めて思ったのでした。

気ままなカーちゃん

8月25日

この日も公園には学童の子どもたちが遊んでいました。

夕方、涼しくなった時間帯に公園でくつろぐ人もあり、ベンチには大人の姿も見えます。

人が大勢いる中にカーちゃんが飛んでくるとは思えなかったのですが、その辺を歩いてみようと思っていると、近くに住む年配の男性の方が、心配して声をかけてくれました。

この間カーちゃんが仲間と歩いていた公園南側の道路を挟んだ所は土手になっていますが、そこには、草花や桜の木などが植えられた緑地帯になっています。

公園にはきそうもなかったのでそこに行ってみることにしました。

自転車を止めストすぐに北の方角からカラスが一直線に飛んでくるのが見えました。カーちゃんでした。

翼を広げて飛んでいる姿は、最初大きなカラスと大きなカラスと思えたのにカーちゃんだったこと、違う場所にも私を見つけて飛んで来てくれたことに目頭が熱くなりました。

近づくとつれ広げた羽がボロボロで、左右対称でなかったのを見るのも切ないことでした。

そばに来て、カーちゃんは卵焼きを食べました。ただ道路は車が頻繁に通るため落ち着かず、そのたびに桜の木に飛び移って逃げていました。

そんなことを繰り返していて何台か目が通過したとき、とうとう近くの民家の屋根、電柱へと移動し、大型電器店近くの電柱へと飛んで行ってしまいました。

電器店の屋上にはたくさんの数のカラスがいます。カーちゃんは屋上にはいきませんでした。近く、近くの電柱に止まって羽づくろいをしていました。周りには別のカラスがいましたが、カーちゃんの家族だったかは離れていたのではありません。少し目を放したすきに、カーちゃんも周りにいたカラスもいなくなりました。

8月26日

この日は一日中雨で、公園には行きませんでした。

8月27日

天候は回復していましたが、カーちゃんもその家族も公園に姿を見せませんでした。

8月28日

夕方いつもの時間より少し早く家を出ました。カーちゃんは公園の手前、大型電器店の交差点のところにて私を見つけて飛んできました。親ガラス、きょうだいガラスも遠巻きながらいます。一緒に行動をしているのだと感じ、少しほっとしました。

一羽だけにあげるのはいかがかと思いながら、餌をねだるので食べさせました。

カーちゃんは自分で少し食べると、口にくわえた餌をどこかに持って行きました。

信号が青に変わったので渡ると、カーちゃんはなんでもおいていくともいうふうには、大声で鳴

きながらあとを追いかけてきました。そして私の自転車に追いつき、そのまま後のかごに飛び乗り公園まで行きました。

日曜で公園に学童の子どもたちの姿はありません。そこでまた少し餌を食べました。

カーちゃん家族も少し移動して公園の周りに来ましたが、一定の距離を保って近くには来ません。

カーちゃんはどうもその方が気になるようで落ち着けなくしていましたが、何を思ったか仲間のいないビデオショップ前の電線まで飛んで行き、そのままどこかに行ってしまいました。

カーちゃんのこの行動には首をかしげてしまいました。自由気ままにどこにでも行ってしまい、家族を振り回しているという感じです。

その思いを強くしたのは、この後畑に行くと、先回りした子ガラス4羽が近くの電線に並んでとまっているのを見たからです。カーちゃんはいませんでした。カラス一家はカーちゃんの行方を見失い、親組、きょうだい組に分かれて捜しているのではないかと思いました。そして今頃は我が家の方に親ガラスが行っているのではないかと気の毒に思ったのです。

8月29日

この日、カーちゃんもカーちゃんの家族も公園に来ませんでした。

8月30日

これまで早朝、太陽が昇るずっと前の、まだ薄暗い時刻に、北の方角から鳴きながら飛んできたカラスが、大型電器店の屋上で、羽を休めている様子を度々見てきていました。

早朝はそう長い時間は屋上にとどまらず、すぐにどこかに飛び立ってしまうので、夕方のようにたくさんの数を一度に見ることはないのですが、それでもたくさんのカラスが、そこを中継点にして飛び立って行きました。

前日の夕方、カラスの数が極端に少なくなっていたことが気になって、この日の朝、気を付けて電器店の屋上を見ました。カラスは電器店の屋上に姿を見せませんでした。夕方もいつもの時間に見てみましたが1羽のカラスもいませんでした。カーちゃんも、カーちゃんの家族も来ませんでした。

天候が崩れそうだというメモがあります。そのためかどうか、周辺には小鳥の鳴き声もありません。

私が育てたカラスの赤ちゃんの話

- I ウッドデッキにいたカラスの赤ちゃん
- II カラスのきょうだいたちがやってきた
- III 畑で暮らすカーちゃん
- IV 畑で暮らすカーちゃん (2)

V 公園のカーちゃん

VI 『夕焼、小焼の あかとんぼ』

『夕焼、小焼の あかとんぼ』（カラスの赤ちゃん）

<http://p.booklog.jp/book/76180>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76180>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76180>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ